論　文

テキストから探る結城紬の文化的特性

立川　和美

1．はじめに

本稿では，茨城県の伝統的特産品である結城紬が，衣文化の中でどのように位置づけられてきたのかについて，文字テクストを通して考察を行う。結城紬に関しては，絹織物としてそれ自体が持つ特性や生産形態，流通経路といった視点から既に多くの研究が行われているが，本稿では特に文化的特性に焦点を絞り，現存する様々なジャンルのテクストによってそれを明らかにしていきたい。日本の衣文化の中で結城紬はどのように生産され，受容されていったのかについて，それぞれの時代背景やこの織物に関わった人々の特性等を，ふまえながら考える。具体的な方策としては，まず文献史料に見られる結城紬の説明をもとに，各々の時代における結城紬発展の歴史を検証し，次いで，この織物が一般に広がったとされる江戸時代以降，どういった人々に受け入れられたのか，そしてその人々は結城紬に対してどのようなイメージをもって着用したのかを明らかにするため，文学テクストにおける表現をたどりながら分析を行っていくことにする。

2．結城紬とは

茨城県の西部に位置する結城市は，鬼怒川に沿った豊かな土壌を持つ，古くから養蚕業が盛んな中世以来の城下町で，絹織物「紬」の生産地として有名である(注1)。主として農閑期に作られる紬は，奈良時代には既に朝廷に献上されていたが，結城紬という名前が定着したのは鎌倉時代以降で，更にこれが他の地域へと流通されるようになったのは江戸時代に入ってからのことである。明治以後，高級品として全国に知れ渡るようになった結城紬は，日本が誇る美しい絹織物の一つとして，1956（昭和31）年に国の「重要無形文化財」に，また1977（昭和52）年には「伝統工芸品」指定されている。重要無形文化財に指定された要件は，以下の三点である。

・真綿から手で紡ぎだした捻りのかかっていない無捻糸を使用する。

・手括り（くびり）を用いて模様（柄）をつける。

・地機（じばた）（＝いざり機）という織機を用いた手法で織る。

これらはいずれも古くから伝えられてきた手間と熟練とを要する技術であるが(注2)，守屋（1986）は，「とりわけその新旧交代の問題に着目すると，（中略）その交代が円滑に行われているとはいいがたく，その結果，製織従事者の高齢化が顕著である。」と指摘しており，後継者不足は深刻な問題とされている(注3)。

さて，結城紬は，大島紬と共に二大紬として有名な着尺地である。蚕の繭（真綿）から手で紬だした均質な生糸を用いるため，紬糸は長繊維が絡み合っており，ふくらみややわらかさがある。それを密に織りあげて，光沢を持つ着物に仕上げると，真綿のようにやわらかく，軽くて温かい，しわにもならないといった独特の風合いが生まれる。

現在は，「本場結城紬技術保存会」によってこの伝統技法が守られている。模様は無地の他に，絣や縞などがあり，着尺1幅に亀甲や十字が120～180並ぶ精巧な絣もあり，織幅の中の亀甲の数の増大に示される模様の高級・精緻化が進んでいる。また生産量は，村田（1996）によると，「本場結城紬」は昭和55年度の約31288反を最高に，平成元年は15468反，平成6年度は7800反と約四分の一に減っていると報告されている(注4)。

この結城紬の工程は，いくつもの段階を経るものであるが，ここではその大枠を紹介しておきたい。

①図案：専用の方眼紙を使用してデザインする。
古くは無地や紺地に縞といった模様が主流だったが，昭和に入ると亀の甲羅の形に似た「亀甲」という縦絣と横絣とを折り合わせて作る柄や，格子，七宝なども多くなった。

②真綿かけ：重曹を加えた湯で繭を煮て，さなぎを取り出して，袋状に広げた後，自然乾燥させて，袋真綿を作る。

③糸つむぎ（糸とり）：「つくし」と呼ばれる道具に真綿をまきつけ，指先に紡いだ糸を「おぼけ」と呼ばれる桶にいれていく。

④絣括り：紬の模様である絣柄となる部分に染料がしみこまないように絣糸を綿糸で縛る。無地や縞の柄ではこの作業は省略される。主に男性の仕事とされ，一番複雑な亀甲柄（200亀甲）では400カ所をしばる。

⑤染色：絣糸を棒の先端に結びつけて染色し，板にたたきつけて染料をいきわたらせる結城紬特有の「たたき染め」の技法を用いる。現在でも一部，正藍による染色が行われている。

⑥糊付け：撚りのない糸を小麦粉の糊で固めて，強度を強める。

⑦機織り：地機という1500年間もの歴史を持つ機織り機で織る。縦糸が無捻糸という弾

力のある柔らかくて弱い糸を用いているため，織り子（織り手）の腰当てに糸を結びつけ，体重のかけ方で糸の張り具合を調整しながら織り進む。これによって丈夫で，軽くて温かいという独特の風合いが作られる。

このように，結城紬は極めて複雑な工程を経て創り出される稀少な織物である。では，この織物が一般に広がるようになるまでの経緯はどのようなものであったのか。次章では，文献史料に見られる結城紬の記録をもとに，その特性や文化的価値の発展を歴史的に追っていくことにする。

3．文献史料からたどる特産物としての結城紬の歴史

結城紬は，崇神天皇の時代に茨城県で織られた絹布が始まりとされ，奈良時代には，常陸国の特産物「あしぎぬ」として朝廷に上納されている。その後，結城氏が北関東で勢力をのばし，室町時代には「結城紬」の名前が徐々に広まりだした。江戸時代には，染法，模様の改良・研究が進み，18世紀初頭から江戸に出荷されて，元禄の町人文化の時代に特産物として定着した。

明治時代には，全国的に商品として出回って親しまれるようになり，大正末期には緯絣（よこかすり）が，更に細工絣と称する経緯絣（たてよこかすり）が考案され，販路は順調に伸張していった。

昭和に入り，戦中の「奢侈禁止令」によってやや人気は衰退したものの，昭和20年の半ばくらいから，亀甲・格子・七宝など伝統的な柄の模様が急速に広がり，再び広く愛好されるようになった。

以上が一般的な結城紬の歴史である。本章では，上古から近世という時代に沿って文献資料に見られる結城紬に関する具体的な叙述の検証を行いながら，それぞれの時代におけるこの織物の実態を探っていきたい。

＜上古・中古＞

①712（和銅５）年『古事記』

『古事記』は，元明天皇の命により，稗田阿礼が暗唱していた帝紀と本辞を，太安万侶が選録・献上したもので，日本の歴史・宗教・政治・文化・風俗などを内容としている[注5]。全３巻のうち，中・下両巻が人代記となっており，中巻のB.C.50（崇神天皇12）年の部分に，後掲の『延喜式』の「調」として奉った「長幡部施」に関する常総の記録と並んで「崇神天皇十二年始メテ男の弓引ノ調女ノ手末ノ調ヲ致サシム」という記述が，また，崇神天皇48年に豊城入彦命を東国へつかわして治めさせたとの記録が見られ，結城市の起源について言及されている。

②807（大同２）年『古語拾遺』

『古語拾遺』は，古来より神典として尊ばれてきたが，その成立のいきさつは，平安初期，古来朝廷祭祀を職としてきた斎部氏を，時の実権を握った藤原氏の一族である中臣氏が圧倒するようになり，両氏が対立する情勢の中で，斎部広成が自氏の不遇を愁訴上奏したことによる。斎部氏の祖神「天太玉命（あめのふとだまのみこと）」とその孫「天富」が，神武天皇の即位に際して功績をあげたことを中心として，その間の国史上の重要事件を記載している(注6)。その中に以下のような記述が見られる。

天富命更求沃壤分阿斎部率往東土播殖麻穀好麻所生故謂之総國穀木所生故謂結城郡［古語麻謂之総今為上総下総二國是也］

（書き下し文）天富命（あまとみのみこと），更に沃壤（こえたるところ）を求（ま）ぎて，阿波の斎部を分ちて東土（あづまのくに）に率て往かしめ，麻・穀（かぢ）を播（ほどこ）し殖（う）ゑしむ。好（よ）き麻の所生（をひたる），故之（かれこれ）を総国（ふさのくに）と謂ふ。穀木（かぢのき）の所生，故之を結城郡（ゆふきのこほり）と謂ふ。［古語，麻を之総（これふさ）と謂ふ。今上総（かむつふさ）・下総（しもつふさ）二国と為す，是也］。

ここには，麻が良く生ずる所が「総の国」であり，木綿（ゆう）を作る「穀（かぢ）・穀木（ゆうのき）」のよく育つ所が結城の郷であるとする結城郡の起源が見られる。

③927（延長５）年『延喜式』

醍醐天皇の勅命により編纂された律令の細則で，藤原忠平によって完成，967年より施行された。神祇官・太政官以下の役所ごとの執務規定をまとめた一大法典で，長く宮廷貴族の規範とされた。この書では，崇神天皇の御代に，多屋命（おおねのみこと）が三野（みの）の国から茨城県久慈郡機初村（はたぞめむら）（現茨城県常陸太田市）に機殿を造営して織物をはじめたという叙述がある。ここで作られた織物「長幡部施」（ながはたべのあしぎぬ）がいわゆる「あしぎぬ（太い生糸で織った絹粗布）」のことで，結城紬の原型だとされる。

以上の文献史料から，結城という地域では，古くから麻や木綿などの樹木に加えて，鬼怒川の肥沃な土壌によって桑が育てられ，そのために養蚕が活発化し，その副産物として「あしぎぬ」が織られるようになったということが分かる。この常陸の国のあしぎぬは，やがて奈良朝廷へ上納され，現在もその一部は正倉院に保存されている。これが改良・洗練され，現在の形に近づいていくものと考えられる。

＜中世＞

④1322（延元１）年『庭訓往来』

著者は未詳（玄慧法師撰か？）だが，一年十二ヶ月に手紙文を配して，一ヶ月往返２通ずつ計24通と，八月十三日書状1通とを加えた計25通から構成された書簡文集である。手紙の中に当時の社会生活に必要な語彙を類別に列挙した部分があり，手紙の模範型を示すのみならず，これらの語彙を手習いさせることを大切な目的の一つとしている。収録語彙は964語で，文化，風俗などの歴史をたどる上で重要な資料となっている。そうした語彙の中の諸国名産の一つとして，「常陸紬」（ひたちのつむぎ）が記載され，地方名産としての存在を立証している。この頃には，常総地方で紬が生産されているという事実が，京阪地方にまで知れ渡っていたということが分かる。

＜近世＞

1601（慶長６）年，江戸時代に幕府直轄領となるこの土地の代官となった伊那備前守忠次は，染色と縞の織り法を技術導入するなど，それまでは無地が多かった紬の振興・改良に務めた。これによって結城紬の名はますます全国に広まり，定着していくことになる。

⑤1645（正保２）年『毛吹草』

重頼編。七巻五冊の俳諧作法書。付合や春夏秋冬，恋などの発句といった俳諧に関する説明の他，古今に渡る諸国の名物を国別に蒐集しており，物産学の重要な資料として百科全書の役割も果たしている。巻三（第三冊後半）において，諸国土産として「伊勢・甲斐・伊豆・武蔵・下総・陸奥・丹後」七産地の十種類の紬が取りあげられ，「下総」の条には「結城紬，中山紬島」が挙げられている。

⑥1715（正徳５）年『和漢三才図絵』

大阪の医師寺島良安によって30余年をかけて著された図解百科事典で，「天・人・地」の三部，そしてその下位部門（百五部門の項目）が立てられている。紬に関する説明の他，当時の地誌などにも詳しく，最上品の紬として「結城紬」が紹介されている。

この他に，この頃には本場結城紬の名声が上がり，1711（正徳１）年には，江戸市場に紬織物を出荷したとの記録も残されており，江戸中期には結城紬が本格的に各地へ販路を広げ始めたことが分かる。

⑦1732（享保17）年『万金産業袋』（ばんきんすぎはいぶくろ）

京都の三宅也来の書。当時各地で生産されていた様々な家内手工業的製品の製法や特色を，器財門，衣服門，酒食門に分けて図示解説を行っている。各種商品については，

その製作工程が詳述されている他，流通過程の具体的内容，取引の単位やその方法などについても記されている。

また「産業袋序」として「享保壬子之春」という年号を付け，「洛西　兼山」の名で「次のような叙述がある。

> 披閲するに一切造物の長短善悪を論シテ，微少の物と言（いへとも）是を漏さず，誠に産業の一助工商の金嚢なるへし。

ここから，商いに関わる者全てが品物の善し悪しを見分け，正当な商取引を実現させようとする「手引き書」としての執筆意図がうかがわれる。結城紬については，以下のように叙述されている。

> 結城紬，下総の国結城よりいづる。幅九寸五ぶ，廣といふは壱尺，丈五丈四尺六尺有もあり。いかにもつよし。煉屋（ねりや）にてざつとふかして染むべし。此ころは島も出れども，もやうがらおもはしからず，公道なるもの也，援よりも木綿島出る。島がら右紬しまに似たり，其外，霜ふり，かすり，綿糸入（又白もめんも出る。至極つよき地なり）。

まず生産地に続いて丈（長さ）の記述があり，当時，結城紬が布地二反分に相当する一匹単位で取引されていたことを示している。また後半は，この織物が主に染色しない状態で取引されていたことを示し，更にその特性（丈夫である）にも言及している。

この書物は非常に多くの読者を持ち，幕末に至るまで重版されたという事実から，江戸中期における流通及び商取引の活発化，そして結城紬がその中の一部として確実に生産・消費を拡大させていったことが窺われる。

⑧その他の史料

近世の中期から後期の結城紬の実態を扱った史料として，この他に，小中村清矩編纂委員長による『古事類苑』（明治29年）には，『絹布重寶記』（田宮楚州編）が引用されている(注7)。『古事類苑』は，本居宣長の国学の系譜を継ぐ，紀州藩古学館頭取を務めた小中村が，維新後，明治政府のために文部省において立案，編纂した書物である(注8)。以下，『古事類苑』産業部十九　紬の項の記述の一部を引用する。

> ［絹布重寶記］紬
>
> 一　結城紬
>
> 　是紬中之最大一なり，外の紬は真綿を引て織なり，結城は不撚，糸を紬糸に

製して織たる物なり，夫故萬事似る物なし，信州紬おもむきは似たれども大きに異なり，結城は別種の佳品也

この『絹布重寶記』は，各地に産出する絹布の大きさや特徴が事細かに記述されているのだが，その中でも結城紬は高い評価を得ていたことが分かる。

また，1748（寛延１）年に刊行された『江戸総鹿子』の中の「近国土産ノ条」には，「結城紬ハ下総結城ヨリ出つ云々トアリ」という記述が見られる。

この後，1815（文化12）年に，江戸問屋55県に紬を出荷し，明暦から延宝（1655年～1673年頃）にかけての20年間に遠隔地商業取引から得る利潤が極めて大きかったという記録が残っており（北島　1982），結城紬は着実にその生産量を伸ばしていった。もちろんこの間に数回に渡って出された倹約令では，絹織物である紬はその使用を禁じられることもあったが，本場結城紬が木綿風であったために禁止令の枠から外れることも多く，結城紬の伝統は保ち続けられた。1830年代に入ると老中水野忠邦によって天保の禁令が下され，百姓町人は絹織物の着用を一切禁じられるという大打撃を受けるが，それが解除された後は，その反動としてかえって人々の中に派手好みの気風が高まり，結城紬は再び人気を取り戻す。その後，紬染織りの技法の進歩と相まって，紬は高級な縞織物へと発展し，縞織りが主流となった。当時の卸商が現在もなお「縞屋」と呼ばれているのはこのためである。江戸末期の1866（慶長２）年には，中河原の大塚いさ，須藤うたの両女によって紬の絣が初めて織られ，一部の人の手による価値の高い織物とされた。

４．近世文学に見られる結城紬

前章では，文献史料を中心に結城紬の歴史を追ってきたが，以下，結城紬が本格的に全国に知られ始めた江戸時代の文学テクストに出現する結城紬の叙述を分析し，その文化的意義を考察していきたい。

４．１．浮世草紙『好色敗毒散』　夜食時分作　1702（元禄15）年自序

題名の「敗毒散」とは発汗解熱剤のことで，遊里におぼれて正体がなくなってしまっている連中の熱をさますという皮肉めいた意図がこめられている。西鶴の『諸艶大鑑』などの短編構成手法を踏襲する15話構成となっている。その内容は，父娘の情交など遊里を離れた領域にも及び，展開も興味深くしかも笑いのある落ちで結ぶ佳作が揃っている。夜食時分は，京都における元禄末年第一の技巧派とされ，当時大変人気のあった作家であった。

さて，「巻之四　第三　銀なき宿」は，分散の難を大阪新町の女郎の口利きによって救われた男が，今度はその女郎におぼれてしまい，再び破産してしまうという間抜けな内容である。以下，その一部を引用する。

> 本人は此恩一生忘れがたしと喜び，歩銀早速渡し，まづまづかの女郎に一禮申さいではと，一期に踏みも見ぬ色里の案内を町代の喜兵衛に尋ね，夕霧の狂言にて聞き覚えたる吉田喜左衛門に近づき，「この大夫どのに御目にかかりたい」といへば，畏まつて「まづこれへ借りましに」と，人つかはすれば，「やれやれ袴の腰あてよ」とたち騒ぐに，喜左衛門も興さめて，是本性にてはあるまいと，気遣ひがる所へ，大夫御出あれば，両手をついて，ありし品々慇懃にのべて，一入御陰と涙をこぼし，せめて冥加のためにと持参の物，由城紬壱匹，畦足袋二足，鰹節十，落雁一袋，鬢付五両，塗台に載せて出されしをかしさ，死ぬるばかりなり，大夫笑ひをおさへて，「御禮に及ぶ事でもないのに」といはるれば，進上物を引舟がことわり言うて戻しけるを，暫しうつぶいて思案し，さりとは世の中に色の道ほど優しきものはないと，即座に得道し，それより遊ぶ心になりて，平押に押すほどに，無分別に銀のはかゆきて・・・(後略)

この作品は，もとは井原西鶴が始めた「好色本」というジャンルに含まれるが，先に述べた通り，「町人物」の雰囲気を持つ作品も収められており，男女を越えた視点から人間の真情を描く作品も多い。こういった理由から，この作品の読者層は，「好色物」よりも広かったことが推測される。さて，ここでは自分の負債を切り抜けるために，債権者である男（河六）の馴染みの女郎（大夫）にとりなしを頼み，それがうまくいった事に対するお礼の折に持参した物として「由城紬壱匹」が挙げられている。お礼の品物は複数あるが，その中の第一のものが由城紬なのである。前章で見たように，1700年頃から江戸市場に紬が出荷され始めていた。当時出始めたばかりの上級品である「紬」は，贅を知る女郎へのお礼の品としては，珍しさも手伝って喜ばれる選択だったのだろう。ここでは，男性から女性への贈り物として，あからさまな贅沢品という意味合いをもって「結城紬」が登場しているとみることができる。

４．２．洒落本『手段詰物　娼妓絹麗』（てくだつめものしょうぎきぬぶるい）山東京伝画作　1791（寛政３）年発刊

洒落本は，花柳界の通と穿ちとを中心的なテーマとし，人情の機微にふれた写生的な文体を持つジャンルである(注9)。洒落本の代表的作家である山東京伝によるこの作品は，文化年間に発行された将棋の駒組と定石の本として有名な『将棋絹飾』をもじり，遊客と遊女との関係を将棋の局面とその詰め手などになぞらえた形で話を展開している。

内容の概略は，次の通りである。大阪新町の廓に近い遊女屋槌屋治右衛門の箕輪の寮で，女郎梅川は病の身を養生している。彼女は，看護の番頭新造梅春を相手に今は勘当の身となって逢うことができない愛人の亀屋忠兵衛との初めて会った時の思い出を語るうちにいつしか寝入ってしまう。梅川は，客もつかず借金も重なり，しかも忠兵衛の子を宿してしまう。そこで二人は，忠兵衛と共に彼の親のいる大和二口（にのくち）村に逃げていこうと決め，新造梅春はその手助けを約束する。二人が落ち合った時に思わず声をあげた梅川を，傍らにいた梅春が呼び起こす。これは全て梅川の夢であった。以下は，この作品の冒頭部近くで，梅川が忠兵衛と初めて出会った時のことを回想する部分である。

ここにむかし大阪新町の郭ちかきにいと閑なる所あり，世を捨人のかくれ笠，地名を箕輪とよびなれしも，蓑にとなへの通ずれば，ぬれのちかきにあるゆゑならん。箕輪の寮とて人も知り，四方に目だちし一トかまへは，新町の女郎や槌屋治右衛門が別業なり。抱への女郎梅川といふおいらんぶらぶらと煩ひければ，保養のためにはしづかなる此の別荘がしかるべしと，番頭新造の梅春も看病のためもろともに，しばらくここに遷居る。ころしも秋の露さむく，菊はたばこにむしられて，尾花は炭の俵につくられ，庭の草木もうつろひて，いとほそく啼くすず虫の，音をきくにさへ苦海の身は，夜みせしらする鈴の音かと，耳おどろかすも理なり。をりからそぼふる露しぐれ，遠寺の鐘の音もしめり，いとど哀れの千燭ごろ，梅川はかの福清がいつしにひとしく，幽霊の濱かぜに逢うたるやうにおとろへて臥具に其身をもたれゐる。そばには新ざうむめ春が気をなぐさめの本よみさし，モシおいらんのとこえ，心もちはどうでおざんすえ。アイけふはいつそようおざんす。ヲヲそれではモウだんだんとよくおなんなんすでおざりいせう。風のあたらぬやうになさりんし。ドレ，薬をあたためて上げ申ンせう。と尻軽に，とし下なれど姉とよぶおいらん大事の心根は妹女郎のかがみなり。梅川は涙ぐみ，ホンニ何から何まで心づけ，しんみもおよばぬぬしの介抱，死でもわすれはいたしんせんにえ。なんのマアばからしいうおざりいす。灸すゑの文句のとほり，世話になるのをあねといひ憂きを語るを妹と，名を呼びかはす流れの身は，せわになつたり又したり，互のことでおざりんすもの，そんなことに心づかひをなさりんすな。サァくすりをおあがんなんしえ。と薬ぢやわんをさし出せば，むめ川は手にうけて，それにつけても苦労になるは，忠兵衛さんの事でおざんす。ヲヲそれも苦労になさりいすな。お前さんの病気さへよくなれば，わたしがどうとも都合して，かけもすまして上申，内証の手まへもとりつくろひ二階のあくやうにして上げ申しンす。縁と云ふものは味なもの，忠兵衛さんの初に来なんしたは，去々年の三月，さくらの初日でおざんしたね。アイぬしはよく覚えておいでなんす。アイサわたくしは，其時のことは忘れはいたしい

せん。しかも其の晩忠兵衛さんの形は羽織も小袖も黒八丈。ヲヲそれそれ下着は對の結城縞。もちものや何やかも，いつそ意気でおざんした。わたしも其の晩まんざらでないと思ひンしたから，床へも早くゆき，なんぞ云ひたいと思つても，モシエほれた男にや，ものの云ひにくいものでおざんすねえ。

この作品は，風紀取り締まりの一環として出された1790（寛政２）年10月27日「洒落本禁止令」のため，袋入りにして「教訓読本」と袋に題して出版された。更に，洒落本の本来の舞台とされる吉原を避け，大阪新町の廓に近松門左衛門の作以来の梅川・忠兵衛を登場させ，遊里の色を戒めるような内容も加えられている。しかし世間の人々は，そういう形になっても山東京伝の洒落本をもてはやし，高い人気は保たれていたのである。

さて，この作品は，こうした社会状況を受けて執筆されているという事情から，それまでの浮薄な色好みの放蕩にふける人物を描いた典型的な洒落本とは異なった趣を持っている。京伝は作中で，男女の実意を描こうとする姿勢を打ち出しており，また，遊女梅川が恋の病を患うという哀れな出だしに始まり，全般に感傷的な味わいを漂わせることで，むしろこの後の「人情本」のジャンルに近い様相が出ていると言ってよいだろう。登場人物の内面・心情を味わう方向にその中心が置かれた作品とみることができる。それだけに，登場人物の人となりを示す服装は，人物描写の一部としてディテールにこだわったものとなっているはずである。この中で，愛人忠兵衛は，初めて出会った時，「黒八丈」の羽織と小袖，下着は「結城縞」を身につけていたとされている。文中にもあるように，当時の遊里の世界で大切な要素であった「粋」ないでたちで，遊女にとっても「まんざらでもない」と思わせてしまう服装なのである。江戸末期の綱紀粛正が厳しく，倹約が美徳とされる中で，下着として「結城紬」を着る人物とはどういう者か。品物の上質（肌ざわりの良さや柔らかさ）を知り，かつ高級な絹織物を見えない所（下着）でうまく着こなす通好みで遊び上手な男性が浮かび上がる。遊びを知り尽くしているはずの遊女がその真情をかけるような忠兵衛の人物像には，単なる派手好みではなく，センスの良さ，高級感がしっかりと表されているといってよい。

５．近・現代文学に見られる結城紬

本章では，近・現代における結城紬の衣文化における位置づけを考えるが，それに先立ち，近代以後の結城紬の生産と消費，流通の実態について大まかにまとめておきたい。

明治初期の品質改良に伴い，高級品となった結城紬は，1880（明治10年代後半）年頃に偽染・粗製織の弊害で大打撃を受けるが，明治20年頃には，トンボ絣・十絣・亀甲絣などの絣模様に加えて，新しく縮み織りが作られるようになる。この縮み織りの技術

は明治期に導入されたもので，昭和40頃までは，本場結城紬とは縮み織りを指すほどとなっていた。また，1900（明治33）年には，明治天皇笠間行幸の際，結城紬のお買いあげがあった。

大正初期には，反幅120個という極めて精密な亀甲絣が記録に残っており，昭和初期に入ると，更に自由奔放な模様が取り入れられるようになる。1929（昭和４）年には，昭和天皇水戸に行幸の際，結城紬をお買いあげになり，現在では名実共に最高級の絹織物としての位置を築き上げている。

以下，まず明治期の文学テクストの中に見られる結城紬について見ていきたい。

５．１．明治期の文学に出現する結城紬

①三遊亭圓朝演述　若林坩蔵筆記『鹽原多助一代記第十編』1855（明治18）年

明治９年に圓朝は，本所に一代で財を為した炭商，鹽原多助という男がいたという話を聞いて創作意欲をかきたてられ，その菩提寺から遺族の調査，その出身地上州沼田における資料収集などを自ら行い，この作品を完成させた。当時としては驚異的な十二万部の売れ行きで，歌舞伎でも上演され，小学校の修身の教科書にも採用されるという人気ぶりであった。こうした人気は，圓朝が描くこの実録物というジャンルが，単なる因果応報や勧善懲悪に終わらず，主人公が努力を積み重ねてみごとに財を為す立身出世物となっている点で，明治の新時代に非常にマッチしていたことに深く関わっているといえよう。それまで娯楽文学として人気の高かった戯作にかわって多くの読者を得たわけであるが，これはもちろん，落語家の演述速記のめずらしさだけではなく，作品内容の質の高さを裏付けるものといえる(注11)。

さて，この作品の中で「結城紬」の登場箇所を見てみたい。冒頭近く，多助が無一文となり，「進退茲（ここ）に谷（きわ）まり，巳（や）むことを得ず今や昌平橋から身を投げやうとする所を背後（うしろ）から抱き留められる」ところから話しが始まる。助けた「此人は神田佐久間町河岸に居る山口屋善右衛門という炭問屋で，家は八間間口で土蔵も幾箇かあり，奉公人も多く使って居」る人物であった。多助は「私ア遠い山國から出て来て便る所もねいから，今身を投げべいと思つた所を，此方の旦那様にたすけられましたものでがんす」と自己紹介する。その後，善右衛門の息子善太郎を紹介される場面が以下のように続く。

多「ヘイ若旦那様でがんすか，ハア今夜は貴方の父様に助けられやした。どうか御目をかけておくんなしよ。貴所の着て居るのは和（やわ）らけえ着物でがんす。
善「家の倅は和けへ着物でなければ着ないのさ。なアにこれは不断着で結城紬だ。
多「ヘイこれが結城紬でがんすか。結城紬と云ふものハ糸を一々手で撚て夫れを高機でかるく打付けて置くのではねへ。女供が力まかせにキイツと締めて織んだから，

容易に出来るもんぢやアねえ。それよを不断に着るのはもつていねえじやがんせんか。これから貴所と両人（ふたり）で一生懸命に成て稼いで此家を大（でか）くしねへばならねへ。貴所も親孝行をして此家を大切に思ふだら，不断は木綿を着るがようがんすヨ。而（そふ）して旦那さん，あれじや奉公人のお菜（かず）が多うがんすヨ。何でも奉公人のお菜は，二度はいらねいから，一度になせいまし。・・・」

この後，多助は自分は善右衛門が心配するほどに睡眠時間を削り，またあんまりみっともないと嘆くほどのぼろを着て，必死に働き，めきめきとこの炭問屋を大きくしていく。「結城紬」は，やわらかい着物でなくては身につけない若旦那が普段着として着ている。ここから結城は決してよそいきの派手なものではなく，不断使いの着物であったことが分かる。しかし，その品質は柔らかくて着心地がよく，しかも多助が具体的に細々と説明するように「結城紬と云ふものハ糸を一々手で撚って夫れを高機でかるく打付けて置くのではねえ。女供が力まかせにキイツと締めて織んだから，容易に出来るもんぢやアねえ。」と，大変手間のかかる工程を経て作られる高級品である。しかもかなり値の張るものであるから，貧乏人の多助は「それよを不断に着るのはもつていねえじやがんせんか。」とするが，これは不断に着る高級品であるからこそ，価値のあるものであり，しかもそれを身につけている人のステイタスが示されると考えられるのである。

ここには，結城紬という高級品を普段着として利用するという当時の男性のスタイルが表されている。しかも上州沼田出身である多助が，結城紬の品質に加えて，その具体的な生産工程を知っているというところから，この時代には既に一般庶民のレベルまで，結城紬はその名のみならず，特性までが浸透していたことが分かる。

②小栗風葉 『亀甲鶴』1897（明治29）年

小栗風葉は，明治８（1875）年に，愛知県知多郡半田市に生まれ，17歳ごろから「読売新聞」に連載された尾崎紅葉の「むき玉子」を愛読し，紅葉への入門を考えていた。明治28年，21歳の時に内弟子として指導を受けることとなり，明治29年にこの作品を発表して，幸田露伴らの推賞を得た。西鶴調の凝った文体が好評を呼んだこの出世作は，造酒屋の倉働きが主家の令嬢へ執着し，のちに自殺するという物語である。『新小説』明治29年12月（１年７号）に発表された。

この作品の主人公「又六」（又公と呼ばれている）は，年は「二十四五のあからがほの，見るから強さうなる骨組み。首筋短く，背高く，目は昏澁（しょぼしょぼ）として常に眠れる如く，唇厚く，鼻の孔（あな）目立ちて大きなるが，煤か，埃か，眞黒に汚れて煙筒（けむりだし）のやうなり。手織縞の筒袖の袷半纏を素肌に着て，縄帯意気地なく，熊のごとき毛臑を露出して」いるような男である。この男が思いをよせる奉公先の令嬢「杉子」の服装に結城銘仙が用いられている。

内儀は煮物の手を住（とど）めて，振返りたる面はさすがに品あり。言語（ことばつき）も優しう，・・・・七輪煽ぐ団扇の手を休めて，お杉お杉と急（せは）しげに呼ぶ。あいあい，と應（こた）ふる声も媚（なまめ）かしき娘は，納戸の蔭より美しき姿を見（あらは）せり。

芳紀（とし）は十七八の未だ初々（ういうい）しき中に，自ずから媚（こび）ある半開の薄紅梅。ぽつとりと下張（しもぶくら）に肉つきたる顎の愛くるしう，微（わずか）に受唇の飽くまで旺洋なる容貌（かほだち），結立の銀杏返しに狗児懸（ちんころがけ）して，節糸のまへだれを懸け，結城銘選の着物に同じき半纏を着たり。阿母様，何の御用でござりまする，と淑に内儀の邊に来れるが・・・・（後略）

ここでは，五代続く古株の酒造家で関東一円を得意とする野社家の美しい令嬢，お杉が結城銘仙を普段着として身につけている。彼女は着物と半纏の両方を結城銘仙で揃えている。この後も，又六は，しばしばお杉をかいま見ては，全く叶うはずのない恋心を抱く毎日を送っているのであるが，ある日，父親（野社康右衛門）が彼女の結婚相手にと考えている男（彭澤令之助）が来訪する。ここでの彭澤の服装は，次の通りである。

年頃三十前後，黒と紺の縞スコッチの背廣に，同じき胴衣（チョッキ），竪縞の大柄の窄袴（ズボン）を華奢に窄（はき）なして，綾羅紗の良古（ややふ）りたる被衣（ヲーバーコート）を着たるが，黒の山高帽子の庇の下より金縁の眼鏡を輝かし，色白の細面に口髭麗しく，片手に酒造検査の尺度を持ちたる，人目に収税官吏と見るより

彭澤令之助という人物は，洋装をスマートに着こなす役人である。当時の男性のスタイルとして，官吏やビジネスマンには洋装が既に浸透していたことが分かる。これは，先に観察してきた結城紬を好む男性達と，年齢や経済状況が同じようでありながら，ライフスタイルや意識が異なることをよく示している。一方，この時のお杉については，「羽織を脱ぎて，帯のみ紫襦子の新しきに結更へ（しめかえ）」て，この客人にお茶を運ぶという叙述が見られる。ここから，彼女が普段着として身につけている結城銘仙が，来客の折には帯を代えるだけでも充分通用するレベルの着物であることが理解される。つまり結城紬は，不断使いできる機能性と品質の高さを兼ね備えた着物であり，男性だけではなく若い女性からも愛好されていたということができるだろう。

③広津流浪『紫被布』1899（明治32）年

『文芸倶楽部』に所収されたこの作品の女主人公お若は，絶世の美貌を持ち，しかも二十代半ばで男を17人もとりかえて淫婦と呼ばれるような女性である。但しこれは単に

彼女が浮気者であるというのではなく，彼女を妻にとのぞむ男性たちが，その外面的な美しさを求めるのみで，彼女を心から愛していなかったという理由が大きい。彼女は，自分の気持ちに正直であり，相手に我慢ができなくなると周囲の評判もかまわずとびだしてきてしまう。お若には藤太郎という兄がいるのだが，死んだ許嫁（お高）のことをひたすら思って墓参りをすることだけを楽しみに，ほかの女性には目をもかけようとしないような男である。お若の実家は「元高田村字鶉山」のもとは裕福で勢力がある家だったが，今はすっかり凋落している。そこへ紫の被布を着た彼女が婚家から出戻ってくるところから作品は始まる。彼女はいつも紫被布を着て，嫁ぎ先を出てきてしまうため，「紫被布のお若」と村人から呼ばれている。被布は，外出用にはおるおくみの深く丸襟の羽織で，主に風流な人物や女性に愛用されている。「紫被布」を題名にしているこの作品では，登場人物の服装について細かい描写が見られる。

さて，結城紬が表れる部分は，「伝通院前の唐物屋」に嫁いだはずのお若が一月もせずに戻ってきた後，雑司ヶ谷の鬼子母神の境内の茶屋で働き始めてすぐに，彼女を見初める男が登場する場面である。以下に引用する。

「おお，寒い風だこと。」

お若が茶屋の軒下から帳場の方へ行かうとした時，二人の男の客が店の床几に腰を掛けた。

一人は結城紬（ゆふき）の小袖に大島紬の書生羽織を着，襟毛の二重外套を被り（はおり），黒の中山（ちゅうやま）の帽子を冠（かぶ）つて，晒の蝉表に銀鼠の一楽と白の鹿革の鰌（どぜう）鼻緒の駒下駄を穿いて居る。年は四十の上を二ツ三ツ，でツぷりと肥つて，顔の色は浅黒いが，細い眼の断えず笑を含んで居る処に愛嬌も見え，鳥渡（ちょいと）見た所が，料理屋の亭主か，さらずば受請師（うけおいし）ででもあるかの様にも見受けられる。

この男は，お若を認めるとすぐに茶屋の女将に向かって「素敵な者がいるね」と声をかけ，お若を「美（い）い女だ。それに様子が温順（おとなし）やかで——女はあれでなくツちや不可え。（いかねえ）」として，彼女に酒の酌を促す。正に彼女の美貌だけに興味を持っている男である。四十二，三歳で料理屋の亭主か請負師といったかなり裕福な商売人であり，しかも女性にもすぐに関心を示すという遊び好きな男性の小袖は「結城紬」なのである。この場面で彼は，必ずしも特別な機会を設けて女性と会うためにお洒落をしてきたという訳ではなく，むしろ男友達と二人でちょっと出掛けるといった普段着に近い服装で登場している。

④近松秋江『雪の日』1911（明治43）年

作者35歳の時に発表された私小説に近い内容を持つ作品である。近松秋江は，明治36年３月に貸席清風亭のお座敷女中だった大貫ますと同棲したが，43年８月末に彼女は家出し，以来行方が分からなくなっていた。この作品は，こういった状況の下で書かれている。その後彼は，明治44年５月に，日光で若い男性と遊んだますの消息を確認し，ますの後を追って彼女の住む岡山まで乗り込んでいく。もはや復縁が絶望的であるにも関わらず，彼女を執拗においかける作者の行動や性格は，作品の中にもよく表されている。

さて，「結城紬」は，自分の妻（「ます」にあたる。作中では「おスマ」という名前になっている。）が，彼女の別れた夫に偶然出会った時の回想シーンでの描写である。

「ああ，さうさう，一度斯ういふことがありました。・・・私，買ひ物にＸ町の通りに行つて，姉と一所に歩いてたんです。・・・姉が，・・・まだ一間半ばかしも行つてゐない方を顎で指し「間抜けだねえ，お前，あれが分からないか」と言ふんです。それが先の連合なの。・・・それが自分の兄さんの嫁と二人連れなの。――私より兄さんの嫁は遅く来て，私が戻つてくる時分には，依然は商売人であつたとか言つて，病身でひどく窶れていたが，顔立ちは好い女だから，病気も直つた（ママ）と見えて，私の知つてゐる時分より若くなつて奇麗になつてゐるの。お召なんかの好い着物を着て，私の連合の方は矢張し（やつぱし）結城なんか澁いものを着てゐました。さうして二人連れ立つて行くんでせう。・・・さうして二人並んで歩いて行くのを見ると，最早縁もゆかりもないんだが，ああして二人で一所に歩いたりなんかするやうでは何うかなつてゐるのぢやないかと思はれて，それが何だか腹が立つやうめ，斯う憎いやうな気がしましたよ。

秋江はこの作品の中で，妻（ます）について次のように述べている。

私は，女と一所になつてから，今では何でもない先の夫との仲をひどく嫉んだ。現在不義せられてゐるものの如く嫉んだ。私はそれが為めに嫉妬の焔に全身を燃した。それが為めに絶えず喧嘩をした。さうして喧嘩をしながらも強く愛してゐた。

作者自身の内部で，妻の前夫に対する感情は激烈であった。そういう愛する妻のもとの連合（夫）の服装が，渋くて好い「結城」となっている。彼女はその姿に対して「腹が立つ」，「憎い」ような気持ちを起こす。この気持ちは，つまり相手の魅力や幸せな様子といったもろもろに心ならずも引きつけられてしまう彼女自身の心を裏返す表現となっている。「結城紬」は，身につけている人が持つ金銭的な豊かさやお洒落と言った心のゆとりを象徴的に示すことで，その人物の魅力を増大させ，見る人を引きつける

のである。もとの連れ合いにそういった気持ちを抱く妻を目の前にした筆者の気持ちは，先の引用から分かるようにそれ以上に穏やかではなかったと考えられる。

以上，明治期の文学テクストに見られる結城紬について観察を行ってきたが，結城紬を身につけているのは，四作品中三作品が男性であり，彼らが醸し出す雰囲気には共通性が見られた。江戸と明治の両方共に，結城紬は品質の高い高級品であり，ある程度の生活レベルを持っていないと手に入らない着物であるという点で共通認識が持たれていた。しかし，江戸期の文学と明治期のそれとが明らかに異なる点は，江戸期には何よりも希少価値の高級品としての要素が前面に出ていたのに対し，明治期に入ると「渋好み」の本当のお洒落を楽しむ人が不断使いに用いる着物という性格が強調されてくるように変化がみられてきた。また，一作品だけ年頃の女性が身につけていたが，やはり不断使いでありながら，高級で裕福な娘の着物であった。

更に，結城紬に係る形容としては，「意気（粋）」「和い（やわい）」「渋い」などがあり，これらも人々がこの織物に対して持つイメージをよく表しているといえよう。

５．２．現代の作品における結城紬

現代，着物の良さが見直されるようになり，若者の間でも古着や普段着としての着物が広がりつつある。そうした中で「結城紬」はどのように捉えられているかを，白州正子のエッセイ「きものが好きになるまで」から考えてみたい。

白州正子は，1910年，伯爵・樺山愛輔の次女として生まれ，４歳のころより梅若宗家で能の稽古を積み，14歳で米国に留学している。当時としては，経済的に恵まれた生活を送り，また日本の伝統文化と国際感覚の両方をバランスよく身につけていた女性である。こうした彼女の生き方は，現代でも広い世代の女性に支持されている。以下，まず彼女自身が身につける着物として「結城」や「紬」にふれている部分を引用する。

> 私が自分で積極的に好きになったものはといえば，その紬とか，八丈とか，木綿絣の類でした。時代もちょうど，柳宗悦さんの民芸運動がはじまった時分で，早くもそのきざしは銀座あたりにも現れており，朝鮮の陶器，日本の雑器，その他の民芸品などとともに，昔ながらの絣や手織紬がひどく新鮮に見えたものです。といっても，まだ私はきものの知識は皆無でしたから，トウィードやホームスパンの感じによく似ているところが，気に入ったのかも知れません。絹と毛織物の違いはあっても，しぶい色とか，立体感のある織り方が似ていましたし，洋服でもいわゆるアフタヌーン・ドレスのよそゆきより，スポーツ・ウエアの方が面白かったので，そういうたちのものが，しぜん目についたというわけです。昼はスポーツ，夜はイヴニング，それが当時の生活で，きものでも，ふだん着と舞台着，その中間がありま

せんでしたし，今でもありません。

ここでは，「紬」の持つ「渋い色」や「立体感のある織り方」といった風合いの良さについてが細かく述べられている。また，よそゆきではなく，普段着としての「手織紬」に着目している点は，それまでの文学テクストに見られた流れを受け継いでいるとみてよいだろう。

きっと，徳川時代に奢侈禁止令が出た時も，こういう思いをした人が多かったことでしょう。その禁止令のお陰で，日本人の趣味は一段と洗練され，表は地味にして，見えない所へ凝るという，しぶい好みが生まれたのですが，この伝統は未だに私たちの中に生きつづけています。今，結城や紬の類がはやっているのも，単なる風潮ではなく，近くは戦争，遠くは将軍吉宗の倹約主義にまでさかのぼることができましょう。人間は，どこかで自由な羽をのばそうとする。まったくお洒落というものにはきりがありません。

とぼしい中で，工夫をこらすのは，ふんだんに物がある時より，どれ程はりあいのあることかわかりません。いいアイディアが浮かぶのも，そういう時で，お金があれば，何でも手に入りますが，足りないのを，無理して買うから，物も早く覚える。私がきもののことを知ったのも，それと同じわけなので，戦争のお陰が多分にありました。

ここでは，白州正子らしいお洒落論が展開され，「見えない所へ凝る」，「工夫をこらす」ことによって日本人の趣味が洗練されていったと指摘している。次に挙げるのは，彼女の夫，白州次郎の着物についてである。白州は，実業家で，後に吉田茂首相の側近となる人物で，欧米流のライフスタイルを身につけながら，古き良き日本人の精神を持った人物としても知られている(注12)。

主人のきもの，…といっても，未だにこれ一組しかないのですが，せめて一枚ぐらいはと思い，たのんだことがあります。

男のきものは，むつかしいので，任せるから作って貰いたいといいますと，「旦那様に会わせて下さい」という。呉服屋さんなどに縁が遠い方なので，未だに顔を見たこともなかったのです。で，会って貰いますと，ポンと手を叩いて，よくわかりました。やわらかい物はダメだな，とか何とかブツブツひとり言をいっていましたが，そこは怠け者のこと，一年ぐらい経ってようやく出来上がってきました。

専門的なことはよくわかりませんでしたが，結城のそろいで，袴もつむぎ風のごつごつしたもの，それを全部しぶにつけたとか，羽織ときもの，袴と帯といったように，布

地により少しずつ濃淡があって，いかにも文字どおりしぶいきもので気に入りました。

ここでは，結城紬が「ごつごつ」として「しぶい」着物として登場しており，本稿でここまで見てきた「やわらかさ」というものは否定されている。しかし，白州氏自身のイメージに合わせて作られた「結城のそろい」の品質は一流でないはずはなく，また着心地も申し分なかったはずである。こういった一流の人物が身につける「本物」としての結城紬という存在がこの文章からは伝わってくる。これは，今まで結城紬が持っていた文化的な性格とは，少し異なるものだといえる。それまでのお洒落さ，粋といった要素は「濃淡の渋さ」などに表されているが，織物自体の持つ風格とそれを着る人物の人格とが融合することによって創り出される「美」がここでは重要なのではないだろうか。そういった意味で「選ばれた織物としての結城紬」という性格が表現されているといってよいだろう。

6．結び

以上，文学テクストにおける結城紬を見てきたが，高級品としての結城紬は，江戸期には稀少な高級品として，明治期には普段着として地味や渋さを好むといった，真にお洒落を楽しむ裕福な男性に好まれ，昭和期には女性も含めて織物自体の品格がそれを着る人の内面と合わされることでより味わいを増すといった形で親しまれてきた実態が明らかになった。こうした結城紬は，全て「着られた」，すなわち着物として出来上がったものであり，「作られるもの」「作られる過程」などに言及された文学テクストは近世以後ほとんどなかった。最後に結城紬が形成した衣文化をまとめる上で，衣文化形成の上で重要な役割を担いながらも，ほとんど意識されていない「作り手」について簡単にふれておきたい。

北島（1982）は，結城紬織物業を，「現在に至るまで原始的居坐機（地機とも云う）によって零細農地片にしがみつく農家の農閑余業的な，家族労働完全燃焼による家計補充片の問屋制度的家内工業である」とし，その保守的な側面を指摘している。結城紬は，高価であるために特権階級のみに需要され，また手作業であるゆえに生産力が低い。こういった事情が，市場の広がりを妨げていることは否めない事実であるといえよう。

時代を通じて高級品としての価値を維持しながら，様々な文化的特性を持つようになった結城紬が，今後，どういった形で更に文化的価値を高めながら，広がっていくのかは，非常に興味深い課題だといえる。

注

（1）鬼怒川はこうした田園地帯を流れることから，かつては「絹川（きぬがわ）」という文字があてらていた。明治40年刊「各府県輸出重要品調査報告」（農務省商工局）によると「茲ニ広ク絹織物ト云フト雖モ本県ニ於ケルモノハ僅ニ結城紬ノ一種トス而シテ其主要生産地ハ結城郡結城町，絹川及其附近ナリトス」とある。

（2）無形文化財に指定されたのは，「平織り」という布地だが，この他に横糸に強捻をかけた「縮み織り」もある。これは「八丁捻糸機」によって捻りをかけた横糸を湯通しすることで捻糸を一割程度縮ませ，布地全体に細かいしわ（しぼ）のあるお召し風の織物としたものである。さらりとした風合いで，昭和20年から30年代にも多く作られ，主に夏季の男物として重用されたが，近年では再び平織りが人気となり，需要も伸びている。

（3）野村（2004）によると，こうした地場産業としての伝統的手工業に携わる人々は，現在，近隣の町村（栃木県小山市など）を含めると，織りに関わる人だけで1,000名程度とされるが，上野（1975）は，結城紬が明治中期以降も広汎に生産を維持できた理由を，「この地域の農業経営が零細であったこと，さらに衰退していった自給的な結城木綿の労働力＝農業労働力を結城紬の下職労働力として利用できたこと」とし，生産現場の状況は必ずしも楽観視できないものと捉えている。

（4）本場結城紬の他に，「石下結城紬」という茨城県結城郡石下町を中心に作られる絹織物もあり，こちらはいざり機を使用せず，本場結城紬よりも生産量がはるかに多い。昭和53年度には227,000反，平成元年は86,977反，平成６年度は50,708反の生産となっている。

（5）帝紀とは皇統譜や天皇家に関係のある重要事項で，本辞とは神話・伝説・歌謡・歴史である。同時期に作られた『日本書紀』に比べて，皇室の由来とその権威を説くところに根本の性格があるとされる。

（6）そのため，本書は全三部構成であるが，主として第三部における，奈良朝に至って中臣氏の専横がはなはだしくなり，そのために斎部氏が衰退の一途をたどらざるを得なかった不満を十一条にわたり述べている部分が，この書物執筆の目的と考えられる。

（7）この『絹布重寶記』の序文には，「何がしはやきほど　京にて絹あきびとなりしが　その品　そのことわりなど　此あきものするわらはべがたづきにと草せしを・・・」とあり，絹の取引にたずさわる人々の手引き書としての目的が示されている。

（8）小中村は，東京大学文学部に古典講習科を設け，欧化主義横行の時代に国学・後文学の命脈を伝える努力をした人物としても知られている。

（9）江戸時代の花柳界としては，京都の島原や大阪の新町，江戸の吉原が有名である。それ以外の京都の祇園や先斗町，大阪の曾根崎新地，江戸の深川・品川・新宿などは素人の遊び場，岡場所と見なされていた。

（10）結局，この書は絶版を命じられ，京伝が手鎖50日に処せられ，筆を絶つことになる。

（11）この他，言文一致といった文学史的観点からいうと，坪内逍遙は圓朝の速記本について「通篇俚言俗語のみ」を用いながら，「実写文学」となった作品であると賞賛し，二葉亭四迷にも「圓朝の落語通りに書いて見」ろと勧めたと言われている。

（12）1900年代初めにして，白州は既に旅行バックは堅牢で知られるフランスのルイ・ヴィトン社の製品を愛用した他，飛行機の中をプライベートな空間としてラフな服装で過ごした逸話などは有名である。

主要参考文献

茨城県立歴史館編（1991）『茨城県史料　近代産業編Ⅳ』茨城県
上野和彦（1975）「紬の町　結城」『地理』20(8)　古今書院　93-103
北島　昭（1982）「結城紬織物業の展開と農村構造」『経済集誌』51(4)日本大学経済学研究会　455-476
小中村清距編（1971）『古事類苑』吉川弘文館
白州正子（1962）『きものの美―選ぶ眼・着る心』徳間書店
寺島良安（1979）『和漢三才図会』新典社
日本古典文学大辞典編集委員会(1985)『日本古典文学大辞典』岩波書店
野村　耕（2004）「歴史の中に生き続ける結城紬」『繊維と工業』60(11) 繊維学会誌　540-542
長谷川伸三他（1997）『茨城県の歴史』山川出版社
三宅也来（1973）『万金産業袋　生活の古典叢書　5』八坂書房
村田和男（1996）「結城紬の歴史と現状」『繊維と工業』52(8)　347-350
森　秀人編（1976）『古語拾遺　新撰日本古典文庫』現代思潮社
守屋晴雄（1986）「結城紬の商品特性について」『龍谷大学経済経営論集』26(1)　129-138
山田俊雄他校注（1996）『庭訓往来・句双紙　新日本古典文学大系　52』岩波書店

本文に引用したテクストについては，『明治文学全集』（筑摩書房（1968）），及び『評釈　江戸文学叢書』（講談社（1970））を用いた。